

子どもの砂遊びの過程と心の動き

——五歳児K男の事例から——

小川 清実

はじめに

子どもが砂とよく遊ぶことは、すでにほとんどの人々が知っている。そして子どもにとって砂と遊ぶことがたいせつであるということも、様々な文献に示されているように、衆知のことである。

たとえば、K・H・リードは『幼稚園 人間関係と学習の場』において、砂と子どもが関わることを次のように位置づけている。

『子どもたちは粘土やフィンガーペインティングのような『きたない』遊びを経験する必要がある。このような経験は、いつもきれいにしようとする努力することによ

り負わされる子どもの重荷を、少なくしてやる助けになる。こういうものは感覚的な経験を与えるので、子どもたちに深い満足をもたらす。(中略)

どろや砂や水も、子どもにとっては粘土と同じような価値があることを、ここで述べておく必要がある。私たちは粘土やフィンガーペインティングを、健全な子どもたちが真から喜んで指も使いながら遊べる、どろんこの穴や水たまりなどの高級な代用品だと考えていることさえある。(中略) 良い幼稚園ではこのような『土に親しむ』経験も与えるであろう。というのは、どろや砂や水なども、自己表現の手段であり、しかも大人の抑制がないかぎり誰にもできる、最も直接的で満足できる経験

だからである。」⁽¹⁾

リードは、子どもが砂やどろんごと関わることは、子どもに感覚的な経験を与え、子どもたちに深い満足をもたらすものであるととらえている。だれでもでき、最も直接的に満足を与えるのが、砂と関わる活動であるとしている。

たしかに、砂や地面とは、どんな子どもでもすぐに取り組めるものであろう。

問題をもった子どもやおとなを治療していく方法のひとつである箱庭療法(Sandspiel)においても、砂は重要なはたらきをしている。レオンハルト・シュレーゲルは、カルフ箱庭療法を次のように評価している。

「子供はおよそ二才から四才の半頃において、砂遊びにとりわけ熱中するものである。実はその際彼らにとって大切なのは、単にたやすく形を作り得る素材——つまり、湿り気を帯び、こねることができ、それがまた彼らに何ともいえない満足感を与えるようなもの——に没頭することの喜びなのである。(中略)

彫塑の素材とか砂とかを用いて遊ぶことは、ある年令においては(本来的な欲求) (Urteiliches Bedürfnis)

だということである。まず始めには単純な球や菓子のような小さな塊の、しかしその後山や谷やトンネルのある風景全体といった固有の形において感ずる喜びは、小さな手の中に形を作ることのできる湿った砂、あるいは手の指の間にさらさら流れる乾いた砂を肌で感ずることの喜びに変わっていく。⁽²⁾

砂や泥と関わるということが、子どもたちが容易に触れ、こねることができ満足する活動であるとするシュレーゲルの見解は、リードと同じ立場にたつとみてよいだろう。

たしかに砂や泥と関わったことで、子どもが満足を得たととらえられる事例は数多い。子どもがじっくりと砂や泥と関わったら、それはたいは子どもに満足を与えた活動とみなすべきであらう。私たちは子どもと共に砂や泥と関わっていく過程で、それが満足した活動であることを共感できる。砂の素材としての特徴によって、

子どもたちはいきいきと活動していくように見える。

しかし、その活動の展開があまりにもはやいので、たとえ子どもと共に活動している場合でさえ、私たちは子どもたちのひとつひとつの活動のすべてを理解するのは困難である。

私たちは、子どもたちが砂場や地面で、砂と関わっている姿をしばしば目にする。それがあまりにも日常的であるために、子どもがどのように砂と関わるのか、なぜそうするのかということについて考察されていないのが実状である。そこで私は、子どもと砂との関わりを細かく見、分析し、考察していくことによって、子どもが砂とどのように関わっているか、そうすることで、どのような満足感を得られたのかを明らかにすることができるのではないかと考えた。そして子どもたちが砂とどのように関わっているのかを事例から分析し、子どもの心の状態について考察を試みた。なお、この事例は、文京区にある音羽幼稚園の五歳年長組の子どもの記録である。

事例

五歳の男児三人が砂場の片隅でそれぞれ穴を掘っている。砂をかき出して外に出す。三人の男児は自分が掘っている穴を深くしようと一生懸命に掘っている。別々だった三つの穴が地面の下でひとつになる努力が続けられていく。腕を穴の底まで伸ばして、つながるかどうかを探りながら作業がすすむ。すぐとなりで遊んでいる子どもたちが使っている水が穴に流れるのを防ぎながら穴を掘っていく。素手で地底のトンネルをていねいに掘っていく。

つながついたらしい。皆の顔が一斉にこっとする。つながつた部分を見ようと穴の中をのぞいている。Kがひとつの穴のそばにため池のようなものをつくる。その間にHとMとは水をくみに行く。Kがつくった池のところに水をあげる。そこから水が穴の中に流れこむ。水が流れたためにこわれそうな部分を直す。HとMは水を流すとすぐにまた水をくみにいく。

Kだけが穴のところにいると、となりで遊んでいた他の子どもグループの男児たちが、Kたちのつくった穴の上を歩いて、穴をこわしてしまふ。HとMはそれにはかまわずに穴の中に水を流し入れる。けれどもとうとう穴は完全にふさがれてしまふ。

KとHとMの三人はつと立って別の砂場へ行く。そこにはHiがつくった大きな水たまりがある。あわがたくさん浮いている。KたちはHiに「あわをとっていい？」と尋ねることがわられてしまう。それでそのそばにある小さな水たまりに浮かぶあわをKがしゃもじで集める。Mは水をくんできて、水をたしてあわをたくさん出す。Mもあわをバケツに集め出す。コップをつかって、あわだけをすくうように努力している。Kもバケツにあわを集める。たいへん注意深くあわをすくって行く。あわをすくいながら、「おべんとうが終わったらまたやろうな」と言う。バケツにいられて「あわができた」と言う。バケツに満々とあわが浮かぶのを見て「これでいいや」「いっぱいだ」「すげえ」と言う。あわを集めたバケツを砂場のふちに並べて置く。

考察 I

この事例は、この後、ほぼ一日にわたる活動である。私はここでKに注目して考察していくことにする。Kは、一日のうちで、穴を掘って水を流す活動、あわを集める活動、そして水が全くつかわれずに白く乾いたさらさらの砂をさわわり、その中に黒く湿った土をいれて見え

なくしてしまうという三つの異った活動を行った。これらのKの活動は、それぞれに意味があると考えられる。

そこで、これまでのKたちの活動をみてみよう。

Kら、三人の男児は地底のトンネル掘りをはじめた。砂場にやってきて穴を掘る。本来、「穴を掘る」とか、その穴の中に「水を流しこむ」活動は、満足のいく活動となりうるものである。Kたちもその予定だった。やっと通じた地底のトンネルに水が流される。彼らが地底のトンネルを完成するまでは、水は排除されていた。Kたち、三人の男児は、黙々と穴を掘り続けていたことから、すでに三人には共通の遊びのイメージがあったのだろう。できあがった地底のトンネルに水をたくさんいれようとしていたときに侵入者があらわれる。他の子どもたちによって、トンネルが踏みつぶされ、破壊されてしまったのである。観察者が驚いたことには、Kたちはトンネルを踏みつぶした子どもたちに、何ひとつ抗議せず、すつと別の砂場へ移動したのである。Kたちにとって、まさに地底のトンネルに水をたたえようとする、そ

の絶頂を破壊されてしまったのだから、破壊した相手を攻撃するのは当然と考えられる。しかし、Kたちは全く抵抗せずに、また特に肩を落とすことなく立ち去ったのである。Kたちにとって、破壊した男児グループは体も大きく、団結力もあり、抵抗できる相手ではなかったの
だろう。

そこで別の砂場へ行き、あわをつくったりして、バケツにあわを集める。あわを集めることで、彼らが先ほど味わった失望がいやされたと考えられる。それは、あわがバケツに一杯になるにつれ、「これでいいや」「いっぱいだ」「すげえ」と言い、昼食後にもまたやろうとしたことから推測することができる。そしてあわが満たされたバケツは、砂場のふちに並べて置かれたのである。この行為は、Kたちが満足してあわを集める活動をして
いたことが裏つけられるだろう。

事例（つづき）

ちょうどそのときKaが走ってきて、これらのバケツをけとば

す。Kaと一緒に走ってきた保育者はKaに向かって「片づけるのを手伝ってくださいのね」と言い、KとMには「だいいょうぶね」と言う。Mは「おれ、手、洗ってこよう」と言って、片づけをせずに、ひとりで部屋に入ってしまう。Kはだまたまま水たまりの中からどろどろの砂を出して、それを水たまりに向って投げる。再びどろどろの砂をとって、壁に向かって投げ
る。手を洗って部屋に入る。

考察Ⅱ

けれどもKたちの活動は再び中断されることになる。Kたちがいていねいに集めた、あわが満たされているバケツが他の子どもにひっくり返されてしまった。おそらくKたちの気持ちとしては「これでいい」と思ったであろう、その一瞬後の出来事であった。Kたちががっくりと肩を落としたのは当然である。さらに追いうちをかけたのは、保育者の行動であった。Kたちは、あわの入ったバケツを取っておきたいと考えていたのだが、保育者はKたちの気持ちを理解していなかったために、単に「だ
いじょうぶね」で片付けてしまったのである。Kたちの

活動は、またしても侵入者によって破壊されてしまったのである。そしてまた彼らは、残念な気持ち、怒りたい気持ちを侵入者に対してぶつけていなかったのである。

保育者という強大な存在が、侵入者を「片づけてください」と受容してしまったのであるから、ぶつけるところがなかったということであろう。Nはさっとこの場から去っていくが、Kは水たまりの中から、びしょびしょの砂の固まりを壁に向かって投げ、びしゃっと泥が散るのを見る。まさにこの活動は、Kの気持ちのあらわれと考えることができる。Kは、これを何回かくり返した後、この場を離れて部屋に入った。

こうして昼食になったのだが、午前中のKは、水を含んだ砂との関わりの活動を主にしていた。しかし昼食後、Kは全く水を含まない、さらさらの砂との関わりの活動が中心となった。

事例（つづき）

（昼食後）

Kはひとりで、たいこばしのところで乾いた砂を集めている。ふるいに砂が一杯になるとさあーとあける。乾いた砂の山の中に手をもぐらせる。砂を混ぜる。集めた砂を高く、山のようにする。その山の頂上に、シャベルで掘って取り出した黒い土をいれる。その上に乾いた砂をかぶせて、掌でとんとんと叩く。山をくずして黒い土と乾いた砂を混ぜあわす。その砂を再びふるいに入れてあける。これをくり返す。（二十分間、くり返す。）

突然立ち上がり、シャベルやふるいを置いたまま、園庭の中央にあるトンネルの中をくぐる。さっと出ると、そのまま三歳児の部屋に入り、ブロックを組み立て、ロケットをつくる。そのロケットを自分の部屋の棚の上に並べておく。そして、ブロックで遊んでいるクラスの友だちと話をする。こうして一日がおわる。

考察Ⅲ

昼食後、Kはひとりで、乾いた、さらさらの砂と関わった。砂という同質の物質であるが、それを白い部分と黒い部分というように対照的にとらえ、白い部分の中に黒い部分をいれて、その上を白い部分でおおって黒い部

分を見えなくしてしまふ活動をえんえんとくり返した。

黒い砂とは水を含んだ砂である。これを全く水分を含まない砂でつつみこみ、さらに混ぜあわせることによって、それらの砂は区別がなくなってしまう。このような活動をKはなぜ、長い時間くり返したのだろうか。

黒い砂は、水を含んだ砂であるが、これはKが午前中に主に関わった水分を含んだ活動としてとらえることができる。Kにとってみれば午前中の水を含んだ活動は、すべて拒否されたものである。拒否された後、Kは、午後には全く水を含まない砂と関わっている。Kは、拒否された行動とは逆の方向である白い砂を扱うという行動にうつっている。午前中に否定された、水を含んだ砂を混ぜあわせることによって、さらさらの水を含まない砂へと変えていく行動を何回もくり返した。こうすることで、Kは拒否された自分をプラスの方向へと転換させていったと考えられる。えんえんと続いたKのくり返しの活動は、Kが立ち直るために是非しなければならなかったのである。

Kは、自分自身を決した後、たいへん象徴的であるが、トンネルくぐりをする。そして全く新しい活動である。ブロックのロケット作りをはじめたのであった。

おわりに

砂遊びというと、すぐに思いつくのがおだんご作りや、山や川づくりである。このような活動の結果や砂に関わる活動がどのように命名されるかということだけではなく、K男の場合のように、砂と取り組んでいく連続的な過程が、砂遊びにおける子どもの心の動きを明らかにすることに必要だと思われる。子どもが何気なくやっている砂に関わる活動のひとつひとつを分析することによって、子どもの活動の特性や発達特性を明らかにすることができると考えられる。

註(1) K・H・リード著、宮本美沙子・落合孝子共訳『新版幼稚園

園 人間関係と学習の場』フレールベル館 昭和五十三年
P 二七八

(2) ドラ・M・カルフ著・河合隼雄監修 大原真・山中康裕共訳『カルフ箱庭療法』誠信書房 昭和五十一年 P 112